

表紙のことば

写真と文：鈴木正美

雪を頂いた日本アルプス。その山々に囲まれた長野県山形村に長芋を作る唐沢康裕さんを訪ねました。山形村は水はけが良く軟らかい土が自慢。特産の長芋は粘りとコク、甘みがあり、とても人気があります。圃場に出ると日差しと風がとても強く、空気も良く、山々に囲まれ、美しい光が降り注ぎます。康裕さんは、「祖父の代ではスイカやリンゴを作っていました。経営のことを考え、野菜に切り替えていったんです。今は長芋が主力です」といいます。掘り取りの作業を見せていただきました。「長芋掘り取り専用のトレンチャーという機械を使い、丁寧に土を崩す。

そのあと、1本ずつ棒で探りながらさらに土を崩して、引き抜きます」

さらりと話す康裕さんですが長芋は長くデリケート。康裕さんも真剣なまなざし。思わずこちらも緊張して見守っていると、土の中から立派な長芋が姿を現しました。

妻のめぐみさんは千葉県出身。農業経験はゼロでしたが、リンゴが大好きで、自分でも作りたくなり、松本市内の農園で研修をしていたときに会ったのが康裕さんでした。



「実はリンゴの畑を最近作りました。一度はやめました、山形村はリンゴもおいしい！嫁さんに任せています」と康裕さん。この土地で丁寧に、確実に。家族思いの康裕さんはこの土地でたくさんの人に愛される長芋と共に歩いていきます。

JAグループ 共通コンテンツ

食・農・地域の暮らしを支えるJAの存在意義や取り組みを紹介するJAグループ共通コンテンツ（JA新聞連『JA広報通信』にて提供中）。今年度は、「変わるJA 広がる地域のきずな」をテーマに毎月Q & A方式で解説します。JA広報誌への掲載等により、組合員や地域住民への情報提供資料として、ぜひ活用ください。

知って納得JA

一協同組合の力

Q JAはなぜ銀行や保険会社のような事業をしているの？

A 信用・共済事業を通じて、組合員の営農と暮らしを守り、より豊かにするためです。

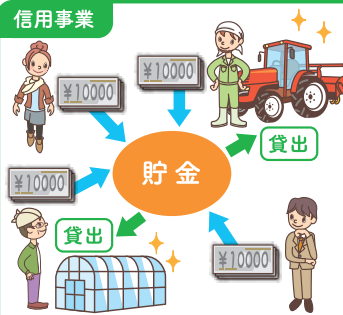
協同組合のルーツの一つは信用・共済事業です。特に農村では、地域の人々がお金や米を出し合って積み立て、そこから困った人がお金を借りたり、災害に遭われた人にお金や米を援助したりするなどの仕組みが、草の根的につくられてきました。こうした地域の「相互扶助」の仕組みが、信用・共済事業として発展してきました。

JAの信用事業は、組合員間で資金を積み立てて融通し合うので「相互金融」と呼ばれ、組合員の営農や暮らしに役立てられています。

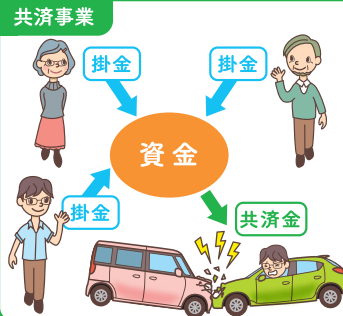
JAの共済事業は、互いを信じ救い合う「相互扶助」の精神の下で行う非営利事業です。組合員の暮らしを守るため、「ひと」「いえ」「くるま」などの保障を充実させています。

（監修＝広島大学 助教 小林元）

「協同の精神」に基づいて行われる JAの信用・共済事業



JAとJA信連、農林中央金庫（農林中金）は「JAバンク」を構成して、金融機関として機能しています。JAバンクはグループ全体のネットワークと総合力で、農林水産業や国民経済の発展に貢献しています。



JAとJA共済連が共同で共済契約を引き受け「JA共済」として保障を提供しています。JAはJA共済の窓口として各種手続きを行い、JA共済連は各種の企画、仕組み開発、資金運用、支払い共済金にかかる準備金の積み立てなどを行っています。

 耕そう、大地と地域のみらい。